

縄文の生活、文化に触れる

古過庵で体験プログラム

茅野市出身の建築史家、建築家の藤森照信さんが設計し、市民とともに建築した竪穴住居「古過庵」(同市豊平の与助尾根遺跡隣接地)を活用するちの観光まちづくり推進機構(DMO)の体験プログラム「No. Jomon No Life」が12日、スタートした。県内外から4人が参加し、栽培作業に使ったであろう道具で縄文流の畑作りに取り組んだ。

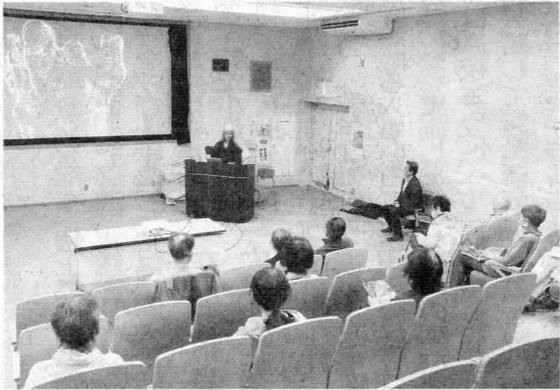


縄文人が使っていたと思われる道具で畑を起こす体験プログラムの参加者

センター主任調査研究員などを務め土偶の発掘にも携わり5年前に茅野市米沢に移住した小葉一夫さん。木の枝やとがった石などで再現した道具が準備され、参加者は、手作り感あふれる道具に縄文人の生活を思い浮かべながら、古過庵前の地面を掘り起こした。畑は広くは無いが、カラムシ、エゴマ、ヤブツルアズキ、アワ、ヒヨウタン、タテアイなどを植える計画。

参加者は40〜60代の主婦や会社員、2拠点居住者など。「ゆつくりと時間をかけて体で感じながら体験することは気持ち豊かなになる」「自然と仲間もできそう」などと話していた。

この地域の自然と調和して暮らすことを縄文人から学ぶ1年間の登録制プログラム。来年1月まで連続2日と1泊2日を含む6回で、土器作り、鹿皮なめし、縄文調理体験などを行う。定員20人で9人が登録。問い合わせは同DMO(電話0266・78・7631)へ。(武井葉子)



縄文土器の特徴や文化などを解説した写真家の滋澤雅人さんの講演会

写真家の滋澤雅人さん講演

富士見町の住民有志でつくる団体「みんなのつどい富士見」(川合弘人代表)は12日、町コミュニティ・プラザで開いた。町内外から16人が参加。20年以上かけて撮影した八ヶ岳エリアや新潟県などの縄文土器の写真を見せながら、特徴や縄文文化の尊さなどを解説した。

講演会や料理などジャンルにとらわれず、町の自然と文化を発信している同団体。今回は井戸尻遺跡を含めた縄文文化を広めようと企画した。

日本文化の源を探ろうと能面を撮り続けていた滋澤さんは、23年前に出会った山梨県の土器に衝撃を受け、縄文土器の撮影を始めたと説明。活動する中で八ヶ岳周辺の土器には顔のような模様が付いている傾向にある特徴を見つけた。「何に使ったか分からないが、現世と来世の間のような雰囲気を感じる」と考察した。

再現道具で畑作り / 土器の魅力解説

町内の井戸尻遺跡の出土品についても解説した。人間を背中から見たようなイメージがある土器については、湾曲などを表現する技術が高いと評価。その上で土器の正面には顔が付いていないことに触れ、「百人一首に登場する女性には後ろ姿など、のちの日本文化は背中が重要視されている。日本にしかない古くから根付いた文化ではないか」と話した。

(濱翔貴)